



100年前の忘れられたインフルエンザパンデミックから学ぶ

関西学院大学法学部 教授 原田 賢一郎

かつて2014年秋号から2015年夏号までこのコーナーを担当したが、縁あって再び担当させていただくことになった。以前と同様、出来るだけ幅広い分野から地方自治や公共政策などに関する図書を紹介したいと考えており、読者の皆さんの参考になれば幸いである。

さて、本年4月7日に政府対策本部長である安倍首相が発出した「新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言」については、同月16日に対象地域が全都道府県に拡大され、5月4日に当初の同月6日までから31日までに延長されたことはご存じのとおりである。読者の皆さんの中にも保健所をはじめとする保健衛生部局や福祉部局、商工部局、教育委員会などで対応にあたっておられる方が多いと思うが、ここでは現在起きていることから一旦離れ、100年前に世界中で3回にわたり流行し、20世紀最悪の人的被害を出したインフルエンザパンデミックの経験から学ぶこともあるのではないかと。

そうした観点から最初に取り上げるのが、『流行性感冒―「スペイン風邪」大流行の記録』（東洋文庫）（内務省衛生局／編、平凡社、3,300円）である。本書は、1918年から始まったこのパンデミックの日本における流行に関して、当時の国の公衆衛生担当部局がまとめた唯一の報告書である。本書を読むと、同年8月から1919年7月までの第1回流行では当時の総人口に対する患者数の割合が約37%に達したことや、同年9月から1920年7月までの第2回流行では患者数に対する死亡者数の割合が約5.3%に達したことなどが記されている。その一方で、1919年1月に内務省衛生局が各府県に配付した「流行性感冒予防心得」では、このインフルエンザが咳やくしゃみによる飛沫で感染することや、予防するためには病人や咳をする者には近寄らないこと、芝居・寄席・活動写真・電車

など多くの人の集まっている所に立ち入らないこと、また、人前で咳やくしゃみをするときは必ずハンカチか手ぬぐいなどで鼻・口を覆うことなどが記されており、現在、私たちに新型コロナウイルス対策として求められているのとはほぼ同じことが推奨されていたことが分かる。

次に取り上げるのは、『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ―人類とウイルスの第一次世界戦争』（速水融／著、藤原書店、4,620円）である。本書は、このパンデミックが日本ではほとんど忘れられ関連著書もない状況を踏まえ、著者の「とにかくスペイン・インフルエンザと、それに曝された人々の悲鳴を聞き、状況を知って欲しい」という願いから執筆されたものであり、「当時の人々は、そのような事態に直面して、どう対応したのか、政府は何らかの手を打ったのか、そして、なぜ忘れ去られたのか」という観点から、当時の新聞記事をはじめとする文献資料や、著者の専門である歴史人口学の知見などを踏まえ、日本を中心に流行の状況や被災の状況が詳しく記されている。

最後に、『感染症と文明―共生への道』（岩波新書）（山本太郎／著、岩波書店、792円）も取り上げておきたい。世界各地で感染症対策に取り組んできた著者は本書の中で、「病原体の根絶は（中略）根本的な解決策とはなりえない。病原体との共生が必要だ。たとえそれが、理想的な適応を意味するものではなく、私たち人類にとって決して心地よいものでもないとしても一。」と述べており、概して「ウイルスとの戦い」という言説が多い中で文明は感染症の「ゆりかご」であり、病原体とは共生せざるを得ないとしている点が興味深い。



『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ―人類とウイルスの第一次世界戦争』速水融／著 藤原書店



『流行性感冒―「スペイン風邪」大流行の記録』内務省衛生局／編 平凡社



『感染症と文明―共生への道』山本太郎／著 岩波書店